



Data 2022-133

監督：オリヴィア・ニューマン
 製作：リース・ウィザースプーン、ローレン・ノイスタッター
 原作：ディーリア・オーエンズ『ザリガニの鳴くところ』
 出演：デージー・エドガー＝ジョーンズ／テイラー・ジョン・スミス／ハリス・ディキンソン／マイケル・ハイアット／スターリング・メイサー・Jr.／デヴィッド・ストラザン

 みどころ

米国で最も売れた本のタイトルが、同名の本作の原作！その場所はノースカロライナ州の湿地帯だ。冒頭、若者の死体が提示されるが、その犯人は、かねてより三角関係で揉めていた“湿地帯の娘”カイア！？

中盤は興味深い法廷劇の中で、カイアの出自や生態が描かれるが、どうしていつもあんなにキレイなの？それが私には不思議・・・。

疑わしきは罰せず！米国はそれが買かれる国だから素晴らしいが、その反面、誤審も・・・？無罪放免後の湿地帯でのハッピーな生活と老後の生活にもビックリだが、静かな“終活”を終えた後に明かされる“あっと驚く事実”とは？その意味をしっかりと考えたい。



■□■米国で最も売れた本！累計 1,500 万部を突破！■□■

本作は、「米国で最も売れた本！累計1,500万部突破！」と言われる、米国のディーリア・オーエンズが書いた原作『ザリガニの鳴くところ』を映画化したもの。「読みはじめたら止まらなかった」と、原作に惚れ込んだハリウッド女優のリース・ウィザースプーンが、自身の製作会社を率いてプロデューサーになったというから、すごい。

日本でも、2021年本屋大賞・翻訳小説部門第1位に輝いたそうだが、そもそもザリガニって鳴くの？チラシには、「湿地帯で発見された青年の変死体。容疑者は、“そこ”に暮らす少女。」とあり、また、「真相は、初恋の中に沈む」と書かれている。しかし、そもそも湿地帯とはナニ？私は北海道の釧路湿原を見学したことがあるが、あのようなもの？そう思っていたが、全編を通してスクリーンいっぱいに映し出される湿地帯はそれとは全然違うものだ。また、舞台は、アメリカの大統領選挙で一躍有名になったノースカロライナ。そして、舞台時代は1969年だ。

しかして、本作冒頭に見る“湿地帯”に暮らす人々の姿と彼らの世界観とは？

■□■ “湿地帯の娘”とは？チェイス殺害はあの女の犯行？■□■

湊かなえ原作のミステリー小説は、女子高生の自殺から始まるケースが多い。しかし、本作は、ある日、ノースカロライナ州の湿地帯の中に、町の有力者の息子チェイス（ハリス・ディキンソン）の死体が発見されることから始まる。

物見櫓からの事故による落下？それとも、誰かの手による突き落とし？指紋も物証も見つからない中、警察は犯人の特定に難航したが、犯人は“湿地帯の娘”と呼ばれるカイア（デイジー・エドガー＝ジョーンズ）ではないかとの噂が広がる中、湿地帯の中で一人で生活しているカイアの家の中の捜索をすると、赤のニット帽を発見。これがチェイスの衣服から見つかった赤い糸の本体かもしれないと考えた警察がそれを持ち帰り、鑑定すると、両者は一致したから、それを証拠にカイアは逮捕され、一級殺人罪で起訴されることに。

そんな経過の中で立ち上がったのは、町の住民の一人である、引退した弁護士トム・ミルトン（デヴィッド・ストラザーン）。国選弁護でも何でもなく、完全なボランティアとして面会にやってきた彼が、「弁護するためには君のことを知らないといけない」と説明すると、おもむろに、カイアは自分の半生について語り始めることに……。それは、想像を絶する湿地帯に住む家族たちとカイアの半世紀だったから、まずはそれに注目！

■□■カイアの告白の注目点は？殺人は三角関係のもつれ？■□■

湿地帯の美しい映像美の中でカイアが語る半生記の注目点の第1は、横暴な父親ジャクソン・クラーク（ギャレット・ディラハント）の下で、母親エリック・チャスティン（アーナ・オライリー）も兄も出て行き、父親との二人暮らしになった後のカイアの生き方。第2は、父親が死亡してしまった後、独りぼっちになったカイアが知り合い、友人になった男の子テイト・ウォーカー（ルーク・デヴィッド・ブラム）との交流。第3は、“湿地帯の娘”ながら（だからこそ？）、湿地の生態系についての知識が本を出版できるレベルにまでなっていたこと。第4は、大学生になったテイト（テイラー・ジョン・スミス）が湿地帯を離れてしまった後、新たに知り合った町の有力者の息子チェイスとの交流。チェイスは、町の中では婚約者や多くの友人たちと楽しく過ごしながら、カイアに対しては、「あれは表向きのこと」、「自分が本当に好きなのはカイアだけだ」と言って結婚の申し込みまでしたが、さて……？

そんな状況下で、テイトが再び湿地帯の近くの勤務先に戻り、「自分が本当に愛していたのは君だけだ」と言いながら、カイアに最接近してきたから、アレレ。湿地帯の娘、カイアは、いわゆる三角関係に？すると、チェイスの死亡は、いわゆる三角関係のもつれの中で生まれたカイアの犯行？物的証拠もそれを裏付けているの？いやいや、そんなことはないはずだ。カイアの告白を詳しく聴き取ったトム・ミルトン弁護士は、乏しい証拠（？）でカイアを起訴した検察陣に対して、法廷で堂々と反論していくことに……。

■□■この法廷劇は面白い！陪審員の偏見との闘いに注目！■□■

『シネマ1』には、「法律のサンルーム 『法苑』より転載」として、「弁護士目で見ると『映画評論』その1 『レインメーカー』にみるアメリカ法廷映画の面白さ」（106頁）と「弁護士目で見ると『映画評論』その4 陪審映画あれこれ」（121頁）を転載した。アメリカの陪審員映画では、黒人差別との闘いがテーマになることが多い。『アラバマ物語』（62年）（『名作映画から学ぶ裁判員制度』34頁）も『評決のとき』（96年）（『名作映画から学ぶ裁判員制度』48頁）もそうだった。しかし、本作でトム・ミルトン弁護士が闘うのは、町の住人から選ばれた陪審員がみんな持っている湿地の娘に対する偏見。証拠調べの中で、彼が見せる証人尋問の技術は素晴らしい。また、最終弁論は短いのだが、『評決のとき』で若手弁護士が熱弁を振るった最終弁論と同じく、差別はダメよ、という陪審員の心に訴えるものだから、それに注目！

本作は前半の半分近くが法廷劇として組み立てられているので、本作は「法廷モノ」としても注目したい。なお、本作では湿地帯で一人で暮らすカイアの唯一の味方として、町に住む黒人夫婦が登場し、法廷でも差別を受けている湿地帯の娘を擁護する立場で大きな役割を果たしているが、これはちょっと出来すぎ。なぜなら、本来黒人である彼ら夫婦は、カイア以上の差別を受けていたはずだからだ。

■□■やっぱり美人はトク！？この才能もビックリ！■□■

本作は、何よりも“ザリガニ”と“湿地帯の娘”という言葉にインパクトがあるうえ、殺人事件に絡む人間模様もよくできており、トム・ミルトン弁護士を核とした法廷劇も面白い。したがって、私の評価は当然高いが、他方、父親以外の家族はみんな逃げていったのに、なぜカイアだけは残ったの？父親の死後、カイアは一人でどうやって生きてきたの？湿地帯の娘として、町の人々から黒人差別以上の差別を受けながら、なぜ彼女は髪の毛も長く、いつもワンピースを着て身綺麗にできているの？絵の才能はともかく、少女時代は文字すら読めなかったのに、テイトから読書を教わっただけで、大人になると湿地帯の生態系を本にするほどの知識を身につけたのはなぜ？等々の疑問が湧いてくる。

子供時代にテイトと友達になり、それが次第に恋心まで拡大していったのはわかるとしても、差別を受け続けている孤独な湿地帯の女が、町一番のプレイボーイのような男・チェイスにまで、あれほど言い寄られるストーリーには少し違和感がある。その意味では、やっぱり美人はトクということだが、そのために三角関係に巻き込まれたのだから、美人であることのよし悪しは？損得勘定は？

■□■ラストにビックリ！弁護士の努力はムダだったの？■□■

本作はもちろん娘時代のカイアがメインだが、導入部では子供時代のカイアが登場する。うえ、法廷劇終了後には、めでたくテイトと結婚したカイアたちの老後の姿も登場する。しかし、映画としてそこまで描く必要があったの？そんな思いを持つ人は私以外にも多いだろうが、本作ではどうしてもそこまで描かなければならない事情があったらしい。

1回目の出版で大成功したカイアが、2冊目、3冊目も出版したことは容易に想像できるが、チェイス殺害事件で無罪となり、晴れてタイトと結婚したカイアは、自分の所有権がハッキリ確定できた広大な湿地帯の下で幸せな家庭生活を送っただけ。そんなカイアにも、自分の寿命を悟る時期が来るのは当然だが、本作ラストはそんなカイアが自分の寿命を悟るストーリーになる。日本では今、終活のあり方が盛んに論じられているが、本作に見るカイアの終活は実に潔いので、ぜひ参考にしたい。それはともかく、本作ラストには、あっと驚く驚愕の事実が提示されるので、それに注目！

トム・ミルトン弁護士の奮闘によって、カイアは無罪になったわけだが、1つの争点だったのは、チェイスの死体に彼が常に身に付けていたカイアからの贈り物であるペンダントがなかったこと。その問題が未解決のまま、刑事裁判は「疑わしは罰せず」の原則どおり処理されたわけだ。しかして本作では、カイアの死後、カイアのノートを見ていたタイトが、あるページにチェイスの似顔絵を見つけ、さらにペンダントも発見したからビックリ！これは一体ナニ？ひょっとして・・・？もしそうだとすると、トム・ミルトン弁護士の奮闘は一体何だったの？本作のそんな驚愕の結末は、一人一人がじっくり考えたい。

2022（令和4）年11月25日記